

## 第18回南のシナリオ大賞

### 大賞

### 庭を見る二人

### 天見ろね

「庭を見る二人」あらすじ

草木を集める音

間宮は雪子の家に足繁く通っている。間宮は不動産屋、家を借りている雪子が出ていけば土地を売る、と大家に言われているため、なんとか手を打ちたいのだがうまくいかない。あまつさえ仲良くなっていく間宮と雪子に上司である柳はご立腹だ。

なぜそんなに退去を拒むのか雪子に聞く

間宮。思い入れのある木から離れたくない、という雪子に、昔祖父に優しくできなかったことを間宮は打ち明ける。そのために雪子に厳しく当たれないのだった。

この仕事を諦めるという間宮に、不思議なことを打ち明ける雪子。木の下に昔何かを埋めた、それを置いていけないのだ……。よからぬことを想像する間宮。それは本当のことなのか、それとも嘘か。二人の関係はまた続いていく。

間宮「ふー。加賀見さん、これくらい葉っぱをかき集めれば大丈夫ですかね。だいたいスッキリしましたよ庭」

雪子「やれやれ、助かった。無駄に広いからねえ、庭掃除も大変よ。ありがとう助かったわ。さ、お茶とおやつにしようか」

間宮「いいっすね、そうしましょう」

ポットからお茶を入れる音

間宮「なんか飲んだことがない味のお茶です。ね。ちよつと甘い？」

雪子「今抜いてもらったドクダミで作ったお茶。匂いは独特だけどお茶は美味しいの。健康にいいよ」

間宮「へえ、初めて飲んだ。このおはぎもうまいっす」

雪子「でしょ。私のおはぎづくりは年季が

登場人物

間宮 優 (24)

加賀見雪子 (68)

柳 慎二 (35)

入ってるからねえ、自信があるのよ」

間宮「うまいうまい」

雪子「若い人の食べっぷりはいいわね。縁側からの景色もスッキリしたわ、こうやって庭を見ながらお茶をするのが一番。間宮くんありがと」

ずっとお茶を啜る

間宮「で、あのー言いにくいんだけど」

雪子「立ち退きのことでしょ」

間宮「うん。加賀見さん、そろそろ決めない？今日も柳さんから強く言われちゃって」  
雪子「相変わらず正直ねえ。歳をとると億劫でね、ちよつと庭に出るのも大義。引越しなーんとてとても」

間宮「手続きや新しい家は会社で手配するから。前も資料を見せたけど、ここよりずっと駅に近くて便利で、そんで新しいマンションを紹介するし。家賃も特別価格。絶

対そつちの方がいいって」

雪子「そうねえ……、あ、ねえ、その木ね。ムクゲっていう綺麗な白い花が咲くんだけ。とても大切に世話しているの」

間宮「はあ」

雪子「思い出深いのよ。この木から離れたくない」

柱時計がなる

雪子「もうお昼。さつま芋ふかそうか。あなたも食べなさい」

間宮「いや、今重要な話の途中……」

雪子「ご飯のほうが大切じゃない。昨日作った煮物もあるから」

間宮「食べようかな……」

雪子「そうそう、一緒に食べよう」

机を叩く音

柳「マジで役に立たねえな、お前！」

間宮「失敗しちゃいましたねえ」

柳「しちゃいました、じゃねえ！ どんだけばあさんとこに通つてんだよ！」

間宮「んー半年ぐらいですかね、手強いっす」

柳「長いわ！ もっとこう強引にさ、話を持っていけよ」

間宮「それがうまいことはぐらかされて。健康にいいお茶とか焼き芋出されると、ねえ。

煮物も一晩おくとコクが出るんですよー」

柳「お前まだ二十四だろ、ハンバーガーとか食えや。なに手懐けられてるんだよ、お前の仕事は相手を立ち退かすこと！」

間宮「急がなくてもいいんじゃないですか。老人は待つてればどうせあの世に行くし」

柳「何悠長なこと言つてんだ。老人の生命

力をなめんじゃねえよ。あいつらは誰より長生きなんだよ。とにかくばあさんを説得しろ。出て行きさえすれば即解決だ」

間宮「でも大家さんも半ば諦めてるっぽい

じゃないすか。加賀見さんが出ていったら  
売ってもいい、なんてこっちに丸投げで」

柳「事情はどうでもいい。あの土地を買い  
上げる、その目的のためにばあさんを追い  
出す。俺たちは地上げ屋じゃないからな、  
正攻法かつ速やかに仕事をこなせ」

間宮「柳さんが行けばいいのに……」

柳「ああ？ 俺じゃ歯が立たないからしよ  
うがねえだろ。のらりくらりがお前の特技  
なんだから、うまく役立てろよ！」

柱時計がなる

間宮「ってことでまた柳さんに怒られまし  
た。わかりやすいパワハラ上司なんすよね」

雪子「面白い人だったね、前も苦虫噛み潰  
してみたいな顔でドクダミ茶飲んでたわ」

間宮「あれは元々そういう顔なんです」

雪子「あはは、あなたも面白いわね」

間宮「加賀見さん、これだけ言われてんの

になんでこの家出ないんですか？ 借家

なんだから住み替えればいいだけなのに」

雪子「四十年も住んでればねえ、愛着がある」

間宮「それはわかるけど」

雪子「まあまあ、目の前のことだけやって

いればいいって。さて、今日の夕ご飯は間

宮くんもいるし、久しぶりにコロツケにし

ようか。食べるでしょ？」

間宮「やった、コロツケ大好きー」

間宮「というわけでコロツケもうまかった  
です」

です」

乱暴にカップを置く音

柳「孫か！」

間宮「心境的にはそんな感じですかね」

柳「お前さあ、なんでそんなに年寄りと相

性いいわけ？ もつとそのメリットを生

かして丸め込めよ」

間宮「年寄りは苦手ですよ。自分のじいち

ゃんとも折り合い悪かったし。でも加賀見

さんはなんか波長が合うっているか……」

柳「……一緒に住もうって言え」

間宮「は？」

柳「そのほうが話が早いような気がする。

そんな気がしてきた。お前のマンションで

一緒に住め、それで解決する！」

間宮「柳さん落ち着いて！」

柱時計がなる

雪子「あはは、やっぱり面白い人ね、柳さん」

間宮「なんか社長から随分せっつかれたみ  
たいでおかしくなってます。そんなわけな  
んで、なんとかありませんかね加賀見さん。  
切羽詰まってるんですよ」

雪子「そうねえ、私はこうやってあなたと

縁側で庭を見ながらおしゃべりするのが

好きだったんだけどね。マンションにベラ

ンダある？」

間宮「え？ 乗り気？」

雪子「ふふ、冗談。間宮くんもそれでいいわけじゃないでしょ」

間宮「はあ、だけど背に腹は変えられないっていうか」

雪子「仕事熱心」

間宮「全然です。何をやってもうまくいかないのです、せめてこの仕事だけは辞めたくないってだけです」

雪子「頑張るのはいいことよ。間宮くんの期待に応えられなくて悪いけど。私はここにいなくちゃいけないから」

間宮「何ですか？」

雪子「残していけないのよね」

間宮「……何をですか？」

雪子「あそこのムクゲの木」

間宮「ああ、大切にしている木ですね」

雪子「置いていくわけにはいかない」

間宮「持っていくわけにもいかないでしょ」

雪子「そうね、だからここにいないと。前の

大家さんはね、私が死ぬまでここにいていって言ってくれたのよ。でもその息子さんには事情を知らないものねえ」

間宮「事情って？」

雪子「それは内緒。さてと、そろそろ時計が鳴るんじゃないかな？」

柱時計がなる

雪子「当たり前。体内時計とびったり合ってるわ。六時ね。今日は何食べる？」

間宮「加賀見さん……そんなに思い入れがあるなら、もう……俺、諦めますよ。って

言っても、俺が来なくなっても誰か違う奴が来るんだろうけど」

雪子「あらあら、出ていけ出ていけって言ってたのに。急にどうしたの」

間宮「それはだって仕事だから。あのさ聞

いてもらえますか」

雪子「うん」

間宮「俺、子供の時博多にいて、じいちゃんと同居してたんです。親がいなくて……じいちゃんすごく優しく可愛がつてくれたんだけど、でも中学くらいから急に鬱陶しくなって。勝手に部屋とか入ってくるのを、出てけよ、とかキツイこと言ったり」

雪子「そう」

間宮「じいちゃん、俺が二十歳くらいの時病気で入院して、仕方なく見舞いに行ったりしたけど、ろくに話もしなくて。その後あつという間に死んでしまった」

雪子「うん」

間宮「最後に手だけ握ったけど……それでおしまい」

雪子「それでよかったんじゃない」

間宮「え？」

雪子「それだけで十分よ、手を握るだけで。お爺さんは嬉しかったよ」

間宮「そう……かな」

雪子「そうよ」

間宮「あの、加賀見さん、言いたくない事情があるなら言わなくてもいいよ。俺も別にそんなに興味ないし。単に仕事だし。ただ加賀見さんの作る飯もお茶も美味しいのって、この家で食べるからってのもあると思うんだよね。残していけないって言ったわけ？ 確かに加賀見さんが必要としている家ですよ」

間宮「……ありがとう」

雪子「え？ あ、いや、お礼なんていいけど」

雪子「私もねえ、握った手を離したくなかったのよ」

間宮「え？ 誰の？」

雪子「ふふっ。随分昔の話。どうしても離れたくなくてね。ムクゲの木の下に埋めたのよ。だから置いていけないの」

間宮「えっ？……何を？」

雪子「なーんだだろうねえ。あらやだ、なんか怖い顔になってる。何にもないわよ。ただ

私にとって大事なものを置いていけないってこと」

間宮「それ……掘り出して持っていけないの？」

雪子「……うん。だって何十年も経ってるから、もう形もないだろうし……でも、そうか。掘り返すなんて考えたことなかったね。うん、間宮くんが来てくれたのも何かのきっかけかも。えっとスコップどこだっけ……。あら、だいぶ日が暮れてきたね、暗い」

間宮「わー！ 待って、やっばいい！」

雪子「びっくりした。何、急に大声」

間宮「いい、いい！ なんか事情があるんだよね？ だから言いたくなかったんですよね？ じゃもうそれで良くない？

思い出っことで、何が埋まってるのかなんて部外者は知らなくてもいいことだし、見たら大騒ぎになるアレだったりしたらアレだし、俺も埋められちゃったりするの

嫌だし！」

雪子「間宮くん？」

間宮「えーっと、僕はもう帰ります！ また！ ごちそうさまでした！」

慌てて玄関を開け閉めして出ていく音

雪子「……あーらら。やり過ぎちゃったかね。まあいいか。手を離すわけにいかないもの」

呼び鈴の音

雪子「あら、間宮くん、いらっしやい。なんだもう来ないかと思ってた」

間宮「いや、この間はすみませんでした。なんか……予想外のこと聞かされてびっくりして……」

雪子「柳さんに言われて来た？」

間宮「はあ」

雪子「どうぞ。枝豆茹でてたのよ。お入り」

間宮「……お邪魔します」

雪子「さ、たくあんも食べて。美味しいわよ」

たくあんをポリポリ噛む音

間宮「うまいっす」

雪子「結局また振り出しに戻る、ね」

間宮「はい。柳さんにお前は甘い！ って、

こっつり絞られました」

雪子「ふふ、まあのおんぴりと。これからムクゲの花もたくさん咲くし。夏になったらトラマトもできるから楽しみでしょ」

間宮「まあそれはそうですね、……あの、この間の話、その木の下に何かを埋めてるっていうのは……嘘、なんですよね？」

雪子「そうねー、うん。……」

間宮「ちよっと！ 思わせぶりに木を見ないでくださいよ」

雪子「ふふ、何を埋めたか覚えてない」

間宮「……え？」

雪子「でも追い出さないほうがいいと思うよ」

間宮「ええ！？ またまた何がほんと？ 俺はどうしたらいいんですか！」

雪子「このまま、このまま。先は長いわ」

柱時計がなる

(終わり)